大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪 OSAKA あそ歩 ぽ ASOBO®

呉の国から来た織女たち
～住吉街道の宿場町・長町（日本橋）を行く～

江戸時代の日本橋は長町と呼ばれ、紀州街道の玄関口で、旅籠宿や木賃宿が軒を連ねる宿場町でした。明治に入って日本橋と町名を改称。大正期には古物屋や古書店が増え、昭和初期にはラジオパーツ店が集積。戦後の高度経済成長と共に一大電器街を築き、現在は日本でも有数のポップカルチャーのまちとなっています。

① 名呉橋跡

上古、この辺りは白砂青松の景勝地で、呉の国から織女たちが渡海して、この浜に着岸したので「名呉の海」「名呉の浜」などと呼ばれました。しだいに陸地化して、この「名呉」が「名呉町」となり、さらに転じて「長町」となったといいます。名呉橋が架かっていた鼈川は、江戸時代には大坂三郷の南端を西から東に流れて、七瀬川(現在は埋め立て)、木津川に合流した川で、昭和29年(1954)頃に埋め立てられました。

② 日本橋総合案内所（でんでんタウン）

平成18年(2006)設置。来街者向けの総合案内所です。「日本橋プロジェクト」から生まれたキャラクター「音々(ねおん)ちゃん」関連グッズの販売コーナーもあります。

③ 石井記念愛染園附属愛染橋病院

日本初の孤児院「岡山孤児院」を創設し、「児童福祉の父」と呼ばれた石井十次が、明治42年(1909)、愛染橋西詰に愛染橋保育所、愛染橋夜学校を開所しました。当時、この辺りは日払い家賃の長屋が連なり、また夫を亡くした幼い子連れの母親が就職に困って母子心中を図った事件があり、保護施策が必須と感じたからです。大正3年(1914)、石井は志半ばにして48歳で生涯を閉じますが、石井と親しかった倉敷紡績社長・大原孫三郎によって(財)石井記念愛染園が設立。昭和12年(1937)愛染橋病院が開院、平成17年(2005)に現在地に移転しました。

④ 秩父宮同妃両殿下台臨記念碑

関東大震災で都市の不燃化が叫ばれた昭和初期、老朽化した長屋が密集する下寺町地区に、日本初の鉄筋コンクリート造市営改良住宅「下寺住宅」「北日東住宅」「南日東住宅」が建設されました。当時は日本有数の大規模不良住宅地区改良事業で、大阪市による社会福祉事業の先駆的試みでした。店舗付住宅や単身者向け住宅、家内工業者のための作業場、行商人のための倉庫、地蔵尊や稲荷の祠が設置されるなど、地域の生業や従前の生活規範を考慮した施設でした。斬新な模範住宅として見学者が絶えず、昭和12年(1937)には秩父宮・同妃両殿下が行啓。南日東住宅の中庭に記念碑が建立されましたが、平成13年(2001)、現在地に移設。住空間が狭小で、ほとんどの住戸に増築された「出し家」の凸凹と、屋上に並ぶカマドの煙突から、俗に「軍艦アパート」の異名で知られましたが、平成18年(2006)にすべて取り壊されました。

⑤ 上新電機

昭和23年(1948) 、日本橋で果物屋を営んでいた浄弘信三郎が、ラジオパーツの卸店「上新電機商会」を創業。昭和29年(1954)に家電専門店へ転換。昭和31年(1956) 、他社に先駆けて修理サービスを受け持つ「技術サービス部門」を新設。昭和38年(1963)は郊外進出の先駆けで「スーパー上新茨木店」に出店。昭和49年(1974)には業界初のテレビショッピング「クレジットショッピング」を開始。昭和56年(1981) は日本初の大型パソコン専門店「J&P」開店、昭和57年(1982) 関西発の大型ホビー専門店「ジェイ・ホビー」開店など、日本橋を一大電器屋街に押し上げた牽引役です。大型電器店が次々と破錠や他社の傘下に入る中、現在唯一の、関西資本の家電量販店です。

⑥ 眺望閣跡

明治21年(1888)、現在のNTT浪速ビルの辺りに開業した遊園地「有宝地」内に建立された、六角柱状の五階建、高さ31メートルのパノラマ式の高塔です。「六甲連山から淡路島まで見える」と評判を呼んで、周囲に茶店、露店などが集まるようになりました。翌年(1889)北野茶屋町の遊園地「有楽園」内に、高さを競うようして建てられた「凌雲閣」(九階建・高さ39メートル)と並んで大阪名所となり、「ミナミの五階」「キタの九階」と呼ばれて賑わいました。高さで追い抜かれた眺望閣は、夜桜の宴や花火大会を催すなど集客イベントを展開。これが現在も続く、ミナミとキタの集客争奪戦の始まりともいわれています。明治37年(1904)に取り壊されました。

⑦ 五階百貨店

眺望閣に押し寄せた観客を当て込み、付近には古物市が立ち、やがてこれらが「五階昼店」と呼ばれるようになりました。古道具や骨董、日用品から舶来品まで、様々な露店が立ち並び、中には貴重な骨董や銘品が嘘のように安価で売られ、「日本橋は掘り出し物の町」という定評を生み出しました。眺望閣が取り壊されて以後、五階商人たちは移転を繰り返した後、現在地に定着して「五階百貨店」を名乗ります。戦後もトタン屋根だけの広場で戸板の上に商品を並べ、物資の供給地として戦後の大阪を支えました。

●日本橋古書店街

破格で豊富な品揃えの日本橋は、よく学生が利用しました。大正期には、それに着目した古書店が増え始め、昭和10年(1935)～同18年(1943)の最盛期、日本橋筋には60店を超える古書店が軒を連ね、東京の神田と並ぶ古書のメッカとなります。その後、流行ものに敏感な若者が集う古書店街の集客力と客層を見込み、ラジオ部品や電気器具の現金問屋が集まりだしていきました。

⑧ 大乗坊（毘沙門天）

正式名称を崑崙山寶満寺大乗坊と号し、もとは四天王寺東北方牛崎(現在の筆ケ崎町)にあり、四天王寺守護寺院でした。織田信長の石山合戦(元亀元年・1570～天正8年・1580)の巻き添えから逃れるために、難波村名呉町の現在地に移り、再興しました。宝暦年間(1751～1763)に信者の帰依寄進で興隆。明治期までは境内千坪、寺領域外周一里を有したといい、『摂津名所図会』『浪花百景』『浪花百勝』などにも描かれました。「長町の毘沙門さん」と呼ばれ、篤く信仰されましたが、明治の廃仏毀釈、昭和の大空襲で、寺領のほとんどを失いました。本尊秘仏の「毘沙門天王立像」は、日本の四大毘沙門天王像の一つで、毎年5月と11月の第二日曜日に御開帳されます。

⑨ 天王寺御蔵跡

宝暦2年(1752)、幕府は高津入堀川の堀止めにあった高津銭座を廃止した跡地に「天王寺御蔵」と呼ばれた米蔵を設けました。天領からの年貢米などを収納し、幕臣への扶持米や飢饉時の救援米を備蓄する倉庫で、東西71間(127メートル)、南北90間(163メートル)、四周には高塀をめぐらせていました。ところが、この地は低湿地で米の貯蔵に適さなかったため、寛政3年(1791)、難波御蔵(現在のなんばパークス辺り)に吸収合併されました。

⑩ 御蔵跡図書館（司馬遼太郎ゆかりの図書館）

大正10年(1921)、大阪市の東西南北の四区に一館ずつ通俗図書館が開館されたうちの一つです。戦局が激化した昭和19年(1944)、戦時託児所に転用され、翌20年(1945)3月の大阪大空襲により焼失しました。司馬遼太郎(本名・福田定一)は、浪速区西神田町(現・塩草)の生家から上宮中学校、大阪外語学校への通学途中にあるこの図書館に、中学一年生から出征時まで通い詰め、本を熟読したといいます。「オランダの農家のような建物があったんです。二階建ての白壁で、屋根の勾配もするどく、いい建物でした。」「図書館にある本の全部といってもいいくらい、読んでいたのではないでしょうか。」(『司馬遼太郎が語る日本Ⅲ』) 復員して、まずどこよりも行きたかったのはあの図書館でした。」(『司馬遼太郎の世界』)

⑪ 羽呉神社（はきもの神社）

元文5年(1740)鎮座の大江神社の境外末社で、かつては天王寺御蔵の鎮守社でした。戦災にあった大江神社が、社殿復興の資金調達のために、羽呉神社再建を条件にこの土地を売却。履物協同組合がその地に大阪履物会館を建設、南隣に羽呉神社を再建しました。商売繁盛を願って、履物の神様を合祀することとなり、全国で唯一のはきもの神社が生まれました。この神社は「羽呉神社」と「はきもの神社」の二つの名前を持っています。

⑫ 御蔵跡履物問屋街（はきはきタウン）

昭和初期、かつて本町四丁目から阿波座あたりにあった履物問屋街が、御堂筋の大拡張により立ち退きを迫られ、御蔵跡町に移転。御蔵跡町は高津入堀川に面し、材木の運搬に便が良く、大正末期頃から下駄職人が多く住んでいたためです。昭和30年代までの隆盛期以降、日本人の生活習慣の洋風化と共に下駄や草履離れが進み、かつての勢いは失いましたが、現在も毎年10月の第四金・土曜日に催される「誓文払い」は健在です。

⑬ 高島屋東別館（旧松坂屋）

明治8年(1875)、新町四丁目にあった老舗呉服屋呉服店を買収して、大阪に進出した松坂屋(当時はいとう呉服店)が、明治40年(1907)の撤退後、大正12年(1923)に大阪再進出を果たしたのが、この地です。大正期から昭和初期の堺筋は、北浜の三越、備後町の白木屋、長堀橋の高島屋、日本橋の松坂屋と百貨店が拠点を並べたことから「百貨店通り」とも呼ばれ、大阪のメインストリートでした。出店当初は木造三階建てでしたが、昭和12年(1937)に現在の建物に改築。戦前の百貨店建築の粋が結集された建物は、完成当時「東洋一の百貨店」とまで謳われました。昭和41年(1966)に松坂屋が天満橋に移転した後に、高島屋が購入。空襲の延焼を免れ、また高島屋が事務所として使用しているため、閉店時から外部も内部もほとんど手を加えられていません。

⑭ 紀州街道の道標

紀州街道とは、大坂から今宮・天下茶屋・住吉・安立を経て堺・紀州に至る街道で、古代には「岸の辺の道」、また「住吉街道」とも呼ばれていました。江戸時代には紀州藩の参勤交代の道ともなり、大坂三郷へ入る南玄関に位置する長町は、旅籠宿や木賃宿が立ち並ぶ宿場町として発展します。文化3年(1806)の『紀州往還見取絵図』では、日本橋を紀州街道の起点としており、長町は交通の要となる重要な地域であったことから、大坂三郷の中核を成していた北組の組織下におかれていました。日本橋や長町は、十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』にも登場し、弥次郎兵衛・喜多八の両人は、長町七丁目(現在の日本橋四・五丁目の中程)の分胴河内屋を拠点に、大坂見物をしています。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局　電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。　http://www.osaka-asobo.jp　または 大阪あそ歩 でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。